

夢野久作の受験生時代とその交友

川 下 俊 文

はじめに

本稿は、夢野久作（一八八九—一九三六）の生涯のうち、彼が東京で受験生として暮らしていた、明治四十三年から翌四十四年まで（一九一〇—一一）の事跡について、日記などの資料をもとに調査するものである。

夢野久作の生涯には、在野の国家主義・アジア主義者として政財界に影響力をふるった父・杉山茂丸（一八六三？¹—一九三五）の存在が、終生つきまとった。西原和海は「久作あるところ常に茂丸あり、といった印象があまりに強烈なのである。確かに久作の全生涯は、あらかじめ父によって設定されたコースにいやおうなく従わされたという感が深いし、そのような父に対する屈折の表現として

彼の文学があったと見ることも、そう間違っていない」²と述べている。

久作の小説作品の多くが、作者自身の生い立ちや見聞——生まれ育った福岡市の風土、玄洋社の人々との交流、兵役・放浪・出家といった特殊環境の体験、農園主・新聞記者・謡曲教授などの職業経験、そして終の棲家となった福岡県香椎村での農村生活——から生まれていることは見やすい。しかし、久作は自己を韜晦する作家であって、自らの生い立ちや、父あるいは複雑な家庭環境に対する葛藤を、そのまま表出することは少ない。それは小説のみならず、随筆においても同様である。これに対して茂丸は、『百魔』（大正十五年）・『俗戦国策』（昭和四年）を代表作として、自身の経験と思想を極めて饒舌に語り続けた人物であ

るが、それにもかかわらず、妻子について言及することはまれである。

茂丸の死後、久作が『文藝春秋』昭和十年九月号に発表した随筆「父杉山茂丸を語る」はその数少ないもので、「なつかしい、恨めしい、恐ろしい、ありがたい父であつた」という一文に象徴されるように、あまりにも強大な父に対する敬愛、反発、畏怖、感謝の念がよく表出している。それだけでなく、久作が自身の生い立ちについて、これほど詳細に語った文章も他にない。したがって、久作の伝記研究は、この随筆と、明治四十三年（一九一〇）分から部分的に現存する日記、そして久作の長男・杉山龍丸による伝記『夢野久作の生涯』や『わが父・夢野久作』（三一書房、昭和五十一年）などを基礎として行われている。多田茂治による、茂丸・久作・龍丸の三世代にわたる評伝『夢野一族 杉山家三代の軌跡』（二二書房、平成九年）は、その代表的な成果といえる。

なかでも日記が同時代の一次資料として最も重要であることはいうまでもない。これについては杉山龍丸が編集・注釈を施し、『夢野久作の日記』（葦書房、昭和五十一年）として公刊しており、極めて有用な研究材料となりうるものである。しかしながら、龍丸による注釈には誤りも少な

くないため、利用に際しては十分に注意しなければならない。日記そのものも、大正二年から同十二年までの十一年間、および昭和六年から九年までの四年間が欠落している点が惜しまれる。また、久作は明治四十三・四十四年の日記の大半と、大正元年の日記の一部を英文で書いているが、文法や綴りの間違い（あるいは刊行時に生じた誤読・誤植とも思われる）が多く、意味を解釈しづらいという問題もある。

これまで、久作の日記は、職業作家になった昭和期のものが多く研究に引用されてきた。それは久作の創作活動の実態を直接に語る内容に富んでいるからだけでなく、大正期以前の日記には以上のような諸問題があつて読みづらい、という理由もありそうだ。それでも、久作の初期の日記（明治四十三年から大正元年まで）が、彼の学生時代を知るうえで最重要資料であることは揺るがない。これを丹念に読み解くことで、従来の伝記的記述に再考を促す余地も多く生まれるであろう。

なお、日記の英文には先述の通り問題が多いが、本稿への引用に際しては、すべて『夢野久作の日記』における表記のまま手を加えなかった。

一、夢野久作の生い立ち

日記を読む前に、久作の生い立ちについて、父・茂丸との葛藤を中心に振り返っておく。

明治二十二年一月四日、夢野久作は杉山茂丸の長男・直樹として、福岡城下に生まれた。杉山家は福岡藩馬廻組に属する、家格の高い武家であったが、明治初年に茂丸の父・三郎平が帰農してからは貧窮に陥った。端的に言えば、茂丸は不平士族の家庭に育ったのである。そうした茂丸が自由民権思想に触れ、藩閥政府の打倒を志すようになったことも、明治十年代の不平士族の子弟としては自然な成り行きだったといえよう。ただし茂丸の場合、政党に加入せず、単身の壮士として東京に潜伏し、政府高官の暗殺を目指したことが、特異ではあった。しかしそれも、伊藤博文に面会して政治事情を問い質した経験（明治十八年頃と推定されている）によって挫折する。その後は同藩士族・頭山滿の知遇を得て福岡に帰り、頭山の腹心となって玄洋社の活動に邁進した。杉山直樹が福岡で生まれたのも、そのさなかのことであった。

ところが明治二十五年の選挙大干渉の後、茂丸は玄洋社から距離を置き、再び単身で東京に出て、伊藤・山県・有

朋・井上馨などの政府高官と個人的関係を取り結ぶことによって、政治の中枢に関与するようになる。本人の回想では、茂丸の主要な政治運動は日清戦争（明治二十七年・八年）の開戦工作に始まる。そして日本興業銀行設立（明治三十二年）における活躍で政財界に名を揚げ、日露戦争（明治三十七・八年）の開戦工作、さらに韓国併合（明治四十三年）の実現へと邁進していく。

久作の幼少期において、このような政治運動に多忙を極めた茂丸は、東京を活動拠点とし、ほとんど福岡に帰宅することがなかった。また、母・ホトリは久作が生まれてまもなく、祖母の意に添わず離縁され、継母・幾茂が杉山家に迎えられた。なお、従来ほとんど顧みられてこなかった事実であるが、茂丸の活動の最初期にあたる明治二十七年三月二十一日、茂丸は隠居届を出して、わずか満五歳の幼児にすぎない久作に家督を譲っている⁶。したがって形式的には、すでに久作が杉山家の当主だったことになるが、実態としては茂丸が家長としてふるまい、久作の人生を左右し続けたことは冒頭に述べた通りである。茂丸不在の杉山家は「貧窮の極に達し」⁷、福岡市内や、同市南郊の二日市町（現・筑紫野市）を転々とした。この時期の久作は学齢に達しても小学校に通わず、祖父・三郎平から教育を受

けていたとされている。

福岡藩校修猷館教授を務めた儒学者である三郎平により、学齡以前から漢籍の素読を教え込まれていた久作は、文章能力において極めて早熟に育った。久作はいう。

同じ二日市で榊屋の隠宅といふのに引越した時に、父が私に羊羹を三キレ新聞紙に包んだのをドンゴロス（ズツクの事）の革靴から出して呉れた。それが新聞を見た初まりで、私が七歳の時であつた。

お祖父様のお仕込みで、小学校入学前に四書の素読が一通り済んでゐた私は、その振仮名無しの新聞を平気でスラ／＼と読んだ。それをお祖父様の塾生が見て驚いてゐるのを、父が背後から近づいてソーツとのぞいてゐることがわかつたので、私は一層声を張上げて読み初めた。すると父は何と思つたかチエツと一つ舌打ちして遠ざかつて行つた。後でお祖母様から聞いた処によると、その時に父はお祖父様にコンナ事を云つたと云ふ。

「十歳で神童。二十歳で才子。三十でタダの人とよく申します。直樹（私の旧名）は病身のおかげでアレだけ出来るのですから、成る可く学問から遠ざけて、身

体を荒つぽく仕上げて下さい」

これにはお祖父様も不同意であつたらしい。益々力を入れて八歳の時には弘道館述議と、詩経の一部と、易経の一部を教へて下すつたものであるが、孝経は、どうしたものか教へて下さらなかった。⁸

他の回想には「私は十歳前後から、読んではいけないと叱られ／＼新聞を読んて居りましたが、そのたんびに、新聞記者といふものは、どうしてコンナに色んな事を探り出すのか知らん。エライものだナアと思つて感心してゐた気持ちなぞが、探偵小説愛好欲の芽生えだつたかも知れまん」とある。この記述からみれば、子供だてらに新聞を読みこなす久作が叱られたのは、俗悪な雑報記事にふれる危険性によるものでもあつて、そうして禁止を受けるからこそ、かえつて久作は雑報に惹きつけられもしたと思われる。しかし「父杉山茂丸を語る」において、この一件は久作の人生に対する茂丸の初めての容喙として描かれる。つまりここで久作が新聞を読むのは彼の文弱の象徴であり、それに対して身体を健康を要求する父・茂丸像がクローズアップされ、後述する十六歳時の進路命令に至る伏線として構成されているのである。

明治三十一年、茂丸は家族を東京の麻布笄町へ迎え、ここで久作より九歳下の異母弟・五郎が生まれた。しかし三郎平夫婦が東京住まいを嫌ったため、翌三十二年に久作と祖父母は再び福岡へ戻る。久作は尋常小学校四年生に編入され、満十歳にして初めて小学校に通い始めたが、明治三十五年に親代わりの三郎平が病死した。そこで幾茂、五郎、異母妹たちが東京から福岡へ下り、久作は祖母・継母・異母姉妹との同居を始める。そして明治三十六年、藩校の流れを汲む福岡県立中学修猷館へ進学した。

久作が十六歳の時における、下記のエピソードはよく知られたもので、長文ではあるが引用する。

中学に通ひ初めると間もなく私は宗教、文学、音楽、美術の研究に凝り、テニスに夢中になった。明らかに当時のモボ兼、文学青年となつてしまつた。

その十六歳の時、久し振りに帰省した父から将来の目的を問はれて、

「私は文学で立ちたいと思ひます」

と答へた時の父の不愉快さうな顔を今でも忘れない。あんまりイヤな顔をして黙つてゐたので、私はタマラなくなつて、

「そんなら美術家になります」

と云つたら父がイヨ／＼不愉快な顔になつて私の顔をヂイツと見たので、此方もイヨ／＼たまらなくなつてしまつた。

「そんなら身体を丈夫にする為に農業をやります」と云つたら父の顔が忽ち解けて、見る／＼ニコ／＼と笑ひ出したので、私はホツとしたものであつた。

「フン。農業なら賛成する。何故かと云ふと貴様は現在、神經過敏の固まりみたやうになつて居る。〔中略〕その神經過敏は農業でもやつて身体を壮健にすれば自から解消するものだ。だから万事は其上で考へて見る事にせよ。現在の日本は露西亜に取られやうとして居る。日本が亡びたら文学も絵もあつたもので無い。〔中略〕」

と云つたやうな事を長々と訓戒して呉れた。

私は父の熱誠に圧伏されながらも、生涯の楽しみを奪はれた悲しさに涙をポト／＼と落しながら聞いてゐた。¹⁰

なお、「父杉山茂丸に語る」における久作の年齢表記は、次に挙げる明治四十年夏（満十八歳）について「十九の時」

とあることから、数え年と判断できる。よって「十六歳の時」とは、日露戦争の勃発した明治三十七年をさすので、茂丸の台詞にはその時局が反映されている。

明治四十年の夏、中学五年生の久作は家族に無断でひとり汽車に乗り、鎌倉・長谷に家を構えていた茂丸を訪ねて、一家の窮状を訴えた。

十九の時に私は母親に無断で上京して、お祖母様と母親を何故九州に放置して置くか……といふ事に付いて、猛烈に父に喰つてかゝつた。すると最後まで黙つて聞いてゐた父はニンガリと笑つて云つた。

「ウム。貴様の神経過敏はまだ治癒^{なほ}らぬと見えるな。よし、それでは今から俺が直接に教育して遣らう。母さんも東京へ呼んで遣らう……」

私は三拝九拝して又涙を流した。

「それには先づ中学を卒業して来い。現在の社会で成功するのに中学以上の学力は要らぬ。それから軍隊へ這入れ。何処でもえゝから貴様の好きな連隊に入れてやる」¹¹

こうして久作は、翌四十一年三月に修猷館を卒業すると

徴兵検査を受ける。乙種合格でありながら熱心に入営を志望した結果、東京の近衛歩兵第一連隊第四中隊に一年志願兵として召集され、四十二年に満期除隊する。その後何度かの教育召集を経て、四十五年には陸軍歩兵少尉に任官するに至る。一年志願兵の入営期日は十二月一日と規定されていたから¹²、多田が記す通り¹³、久作は明治四十一年十二月一日から翌四十二年十一月三十日まで軍隊生活を送つたわけである。この経験については「父杉山茂丸を語る」のほか、随筆「ざんげの塔」にも記されており、小説「戦場」の戦闘描写にも活かされたと思われる。

近衛連隊への入営については、久作に天皇の親衛隊の一員としての権威を与えることで、茂丸の後継者の地位をめぐる家庭内の暗闘から守るため¹⁴、あるいは茂丸の政治活動に連座して久作が官憲の追及を受けないようにするため¹⁵、といった説が、杉山家では伝えられている。杉山龍丸によれば、継母および茂丸の取り巻きの一派が、異母弟の五郎を擁立し、久作を精神異常者に仕立てて廃嫡しようと策動しており、『ドグラ・マグラ』における精神病院の描写も、こうした経験に基づくものであるという。これについては、先述の通り、法的には久作がすでに杉山家の戸主であつたこととの整合性が問題になる。しかし、青年期の

久作がこのような家庭問題に直面していたことは確かであろう。

こうした家庭問題に加えて、茂丸は「教育亡国論」を主張する、高等教育不要論者であった。『其日庵叢書第二編 青年訓』（大正三年）において、其日庵主人こと茂丸はこのように述べる。本来、教育の意義は「勅語にもある通り」、「健全にして有益なる人物を造り上げる」ことである。しかし政府は国民に教育熱をあおっておきながら、十分な数の高等教育機関を整備する財源がないので、試験によつて学生を選拔し、多数の落伍者を生み出している。これは「まるで陥穽を作つて置いてこれに陥つたものに対してなぜ気を附けないと云つて責めると同様」の冷酷な処置である。これらの落伍者は東京の悪風に染まって不良少年になる。幸い大学に入った学生も、試験制度によつて学問漬けにされたあげく、苦心して卒業証書を手に入れたところで就職先がないから、煩悶青年・高等遊民になる。

今日の日本の教育制度は第二の国民たる青少年の手を執つて陥穽に突落し、偶々陥穽に陥らざるものは、試験と称する鉄槌を以て其脳天を打碎き、学問と云ふ劇薬を与へて健康を破壊し、神経を過敏にし、殆んど半

病人の体となして更に其の揚句、食物を与へずに乾し殺すも一般である。〔中略〕庵主の常識で一言すれば親が子を産んで常識を検査するのは二十年までとして貰ひたい。夫から一二年兵隊に遣つて鉄砲の台尻で打敵かれて来ると、其青年の体は首が肩にメリ込む様になつて帰つて来る。夫を追ひ廻して活世界を縦横させると、土を担いでも学問上常識ある土方が出来るのである。此が真正なる国家の福利である、夫以上専門の技芸を得たいものはドンナ高尚な学校に入るも随意である。三十歳まで短艇を漕ぎ球を抛げて暮さねば返して呉れぬ学校の存在は疑ひもなく亡国であると思ふ。¹⁶

このように茂丸は、学問⇨神経過敏、兵役⇨体力増進、という二項対立を掲げて、日本の教育制度に強い不信を示した。社会人としての常識を養うには中学校までで十分であり、それ以上の高等教育は、青少年の健康・思想を歪める弊害が大きいとする。「短艇を漕ぎ球を抛げ」、すなわち高等学校・大学における代表的スポーツであったボートレースや野球については、役に立たない閑遊戯として排斥し、体力増進の利点を認めていない。

二十歳になった息子を「一二年兵隊に遣」り、除隊後に

は「夫を追ひ廻して活世界を縦横させる」とは、まさに茂丸が中学卒業後の久作に対して行つた指導そのものである。茂丸自身、正規の学校教育を受けたことは一度もなく、徒手空拳で政治運動へ身を投じた壮士の出自であつた。そのように生きてきた父であればこそ、我が子の成長に対しても、学問の価値を多く認めなかつたのであろう。

除隊後、久作は茂丸の指示を受けて、福岡近郊の香椎村唐原に三万三千坪の土地を購入した。これが後年の杉山農園となる。ただし土地購入の具体的な時期は明らかでない。杉山龍丸は明治四十二年中としながらも、「この件不明、大正元年とも思われる」¹⁷と疑問視している。一方、多田は除隊直後にあたる明治四十二年十二月のできごととしているが、根拠は明らかでない。

当時の杉山茂丸および杉山家の住所については、室井廣一による詳細な調査がある¹⁸。特に明治二十年代、茂丸が政治的地歩を固めつつあつた時期においては、東京における茂丸、および福岡で貧窮生活を強いられていた家族とも、極めて頻繁な転居を繰り返しており、正確な年次を突き止めることは現在においても困難である。しかし日露戦争後の明治四十年代、すでに政財界に隠然たる勢力を振るう地位を確立した茂丸は、下記のような複数の住居を構え

ていた。

・台華社（東京市京橋区築地三丁目十五番地）

海軍大学校の北隣にあつた茂丸の事務所兼住宅で、「政治活動の最大拠点」¹⁹。設立時期は未詳で、室井は明治三十六年頃または四十一年頃とし²⁰、多田は久作の一年志願兵入営中にあたる明治四十二年頃とする²¹。茂丸が事実上の主宰者となつて大正六年に創刊した月刊誌『黒白』の発行所も台華社内になされたが、大正十二年九月の関東大震災により焼失した。現在の中央区築地四丁目三番の南角に相当する。

なお、台華社の近隣にも、茂丸は「築地の小さな家」を構えていた²²。間取りは茂丸居室・給仕控室・台所のみで、台華社とは対照的な、私的空間だったことが窺われる。

・其日庵（東京府南葛飾郡隅田村大字隅田一四一二番地）

隅田川東岸、向島の堤上にあつた茂丸の別荘。建設時期は明治三十一年頃（多田）²³または三十二・三年頃（室井）²⁴とされる。茂丸は友人・後藤猛太郎（後藤象

二郎の子）を愛人ごと引き取り、日露戦争前まで同居していた²⁵。また、桂太郎・児玉源太郎らと日露戦争開戦工作の密談を重ね、「鹿ヶ谷」と自称した地でもある²⁶。明治四十二年五月、茂丸は邸内に神社を造営して児玉の霊を祀り、庭園も開放して遊覧に供したが、明治四十三年八月の大水害により被災し、廃絶した。大正二年、日活が土地を買い取って向島撮影所を置いた²⁷。現在の墨田区堤通二丁目十九番一号、墨田区立桜堤中学校の敷地に相当する。

なお、其日庵に代わる庵室として、茂丸は明治四十四年頃に江ノ島に別荘を建て、邸外に児玉神社を置いた。別荘は大正六年頃に人手に渡ったが、児玉神社は大正七年に公認を受け、今も江ノ島に鎮座している²⁸。

・長谷の家（神奈川県鎌倉郡鎌倉町長谷三〇五番地）

大正七年六月に夢野久作が香椎村へ戸籍を移すまで、杉山家が本籍を置いた住所。鎌倉西郊の丘陵を利用し、由比ヶ浜を見下ろす広大な家屋だった。明治四十四年七月二十一日、夏目漱石が親友・中村是公（第二代満鉄総裁在任中）とともに訪れて一泊し²⁹、『彼岸過迄』の一篇「須永の話」の舞台としている³⁰。中村

は茂丸の親友・後藤新平（初代満鉄総裁）の腹心であった。なお、漱石が去った翌日の七月二十三日、夢野久作が入れ違いに長谷を訪れ、夏休みの長期滞在を始めている。茂丸二女・石井多美子の記憶によれば、大正七年頃までに、この家屋はなくなっていたという³¹。

これらのうち、明治末年の夢野久作が頻繁に訪れたのは、台華社（父との面会のため）と長谷の家（長期休暇や祖母の看病のため）である。「築地の小さな家」や其日庵、江ノ島別荘を訪ねる記事は、日記中には全く見受けられない。杉山龍丸によれば、茂丸は主として台華社や其日庵で暮らし、長谷の家は妻・幾茂が中心となっていたという³²。多田は、茂丸が其日庵を社交用、長谷の家を執筆・休息用などと使い分けていたと記している³³。久作の行動からも、台華社は茂丸の公的な仕事場、長谷別荘は杉山家の人々の滞在地、そして「築地の小さな家」や其日庵は久作も訪れない茂丸の私的空間、という使い分けが窺われる。

このように、茂丸は東京および近郊に複数の居宅を構えていたが、それにもかかわらず、除隊後の久作はいずれにも同居しないで、千駄ヶ谷で下宿を始めた。当時は東京市

外の豊多摩郡千駄ヶ谷町だったが、すでに中央線の千駄ヶ谷駅があり、高頻度の電車運転を行っていた。後述する神田の予備校にも中央線で通学することができたので、下宿先として不足はなかったのだろう。

なお、久作が自活のために働いた形跡は日記中にいっさい見られないので、生活費や学費は茂丸に依存していたものと思われる。

二、夢野久作の受験生生活(一)――進路問題の再燃

明治四十三年一月一日、今年で二十一歳になる夢野久作は鎌倉の杉山家にあつて、祖母・両親・弟妹・友人たちとともに正月を祝った。四日、久作は弟妹、母方のいとこ、親友で後に杉山農園を共同経営することになる奈良原牛之助とともに上京、五日に千駄ヶ谷の下宿に入る。ただし日記の記述では「鳥森から電車に乗って千駄ヶ谷へ戻った」(I returned Sendagaya by the electric cars from Karasumori to here.) となっているから、除隊直後の四十二年十二月中旬に下宿暮らしを始めていたことがうかがわれる。

一月四日の日記には、「私の新しい運命が待ち受けている東京へ」戻った (to Tokyo where my new fate had been waiting.) と書かれている。また一月二十日の日記にも、

「ここ数日、私は将来の人生の進路を選ぶことに深く苦悶している。〔中略〕いま、私は人生の岐路に立っている」と記す。久作が直面した岐路とは、何であろうか。

その第一の方向は進学であった。これに関係する記事を挙げる。

一月八日(土)

午前、神田へ行き、中央の予備学級への入学手続きをする。

(Beforenoon I went to Kanda and took the steps to enter the preparational class of Chuo.)

一月十日(月)

朝九時に下宿を出て、中央大学へ入学しに行く。しかし残念なことに、私は高等学校への予備校のことを、大学への予備校だと勘違いしていた。

(I left home at nine o'clock [...] and went to Chuo-daigaku to enter it, [...] but to my disappointment I took the Preparational school of higher school for P. S. of University.)

当時、中央大学は神田区錦町二丁目にあったから、久作が神田へ行ったという記述はわかる。しかし、この preparational class または school とは何を指すのだろうか。杉山龍丸による注では「中央大学の予備校」³⁴とあるが、これだけではよくわからない。そこで『中央大学学制一覧』（明治四十一年八月発行）をみると³⁵、当時の中央大学（法令上は旧制専門学校）には大学部・専門部の二部があり、大学部には本科・予科、専門部には正科・別科があったことがわかる。大学部または専門部の卒業者は、さらに研究科へ進むこともできた。また、これとは別に、官立高等学校・高等商業学校および専門学校への受験予備校として、中央高等予備校が併設されていた。これらの組織のなかから日記の記述に当てはまりそうなものを選んでみると、preparational school of higher school は中央高等予備校、P.S. of University は中央大学予科をさすものと考えられる。

一般に、大学予科は高等学校（現在の大学教養課程）に相当する教育課程である。中央大学においては三学期制をとり、第一期は四月から七月まで、第二期は九月から翌年二月まで、第三期は三月から七月までであって、標準修業年限は合計一年四ヶ月となる。入学時期は各学期の初め、すなわち四月・九月・翌年三月と定められていたが、それ

以外でも補欠人員を臨時入学させることが許容されていた³⁶。

一方、中央高等予備校は正規の教育課程ではなく、あくまで受験予備校にすぎない。高等学校への受験競争の激化という需要に応じて、明治三十八年八月五日に設立認可されたものである。しかし私立大学が官立学校への受験予備校を附設することについて経営陣のなかでも異論があり、かつ手狭な大学校舎を割いて予備校に充てることも大学運営の観点からは問題があったことから、中央大学の旧制大学昇格に伴って、大正九年三月に廃止された³⁷。標準修業年限は九月から翌年七月までの一年間で、入学時期は学年の初め、すなわち九月と定められたが、大学予科と同様に臨時入学を許容した。³⁸

中央大学予科・中央高等予備校は、ともに入学資格を満十七歳以上の中学校卒業者に与えていたので、修猷館を卒業した二十一歳の久作は、どちらにも入学する資格があった。前年十一月に満期除隊した久作にとって、学年途中の一月からでも臨時入学が可能な両校は、ちょうどよい学校であったと思われる。しかし久作は大学予科と高等予備校を取り違えたのか、あるいは高等予備校を大学への受験予備校だと思い込んでいたのか、どちらにしてもよほど迂闊

なことであるから推測が難しい。いずれにせよ久作はこの高等予備校に入学し、受験勉強を始めたのである。

なお、中央高等予備校の有名な出身者としては、和辻哲郎・岸信介が挙げられる。和辻は明治三十九年三月に姫路中学校を卒業後、四月に上京して予備校に通い、七月の第一高等学校入試に合格した。和辻によれば予備校の授業は受験準備に特化したものではなく、「教科書は中学のとはぐ同じやうなものであつたし、その取扱ひ方は中学でよりも余程のんびりしてゐた」。例えば英語の授業でも生徒を指名することなく、「教師がやつて来て教壇に立つと読本を開いて自分で読んで自分で訳して生徒に聞かせるだけ」だった。そういうわけで和辻は、予備校といえども受験競争のための「特殊な訓練などの行はれてゐないことに安心して、反つてのんきな気持ちになれた」という³⁹。

一方、岸信介は大正三年三月に山口中学校を卒業し、和辻と同じく一高受験のために中央高等予備校へ通学した。岸はこのように回想する。

私は中学を卒業すると間もなく上京し、本郷森川町の桜館という下宿に落着き、中央大学の予備校に通い受験準備をすることになった。〔中略〕当時の予備校は

頗る雑然として居り、規律も節制もなく、休んだり遅参早退することも勝手であつた。そんな雰囲気であつたから今から思うと汗顔の至りであるが、笈を負うて家郷を出た時の決心も何処へやら、余り勉強をしなかつた。⁴⁰

岸は予備校の雑然とした雰囲気慣れ、活動写真・芝居見物に興じ、あるいは下宿に寝そべって駄弁りなどしていた。一高に最下位ぎりぎりの成績で滑り込んだ岸は、その後一高・帝大を通じて勉強に没頭したが、そんな岸が送った束の間の遊興の日々が予備校時代であつた。

これらの回想から久作の受験生生活も推して知るべきである。久作も岸に負けず劣らずの遊びぶりで、日記には寄席や活動写真へ行く記事が多い。一方、秀才の和辻にとっては「のんびりしてゐた」予備校の授業であつたが、久作は受講に困難を感じる場面もあつた。軍隊生活を挟んだせいか、修猷館での学習内容を忘れてしまつていたのである。

一月二十一日（金）

午前、いつも通りに登校して授業を受けたが、もはや私には初耳のように聞こえた。福岡の中学校で得た

知識をすべて忘れ去ってしまったから。

久作が直面した困難はこればかりではない。予備校での勉強のかたわら、彼は進路問題について父・茂丸と話し合う。しかし一方的に意見を聞かされるばかりで、自分の主張を通すことができずに引き下がってしまうのである。

一月二十二日（金）

進路の選択にとっても苦勞しているの、今日は学校へ行かなかった。そして父と話して意見を聞くために台華社へ行き、父の休憩時間を三時まで待った。楽しく燃える火の傍で、私はこれまでほとんど考慮してこなかった家庭の問題に関する、父の意見と主張を聞いた。私は自分の言葉を頭の中に隠したまま帰宅した。

一月二十四日、久作は the school of gardening at Komazawa を見学しに行き、帰り道で「この学校に入ろう」と決意する (on my way home I resolved to enter this school.)。この学校について龍丸は注をつけていないが、東京府立園芸学校をさすものと思われる。明治四十一年、東京府荏原郡駒沢村（現・世田谷区深沢）に創立され、現在でも都立園芸

高校として同地に所在する学校である。

明治四十一年—四十四年度の『東京府立園芸学校一覽』によれば、同校は「園芸ノ業ニ従事セントスルモノニ適切ナル教育ヲ施スヲ以テ目的ト」する。修業年限は三年、学年は四月から三月までで、入学資格は二年制高等小学校または中学校二年次の修了者とされているから、つまり教育課程としては中学校の三年次から五年次までに相当する。言い換えれば園芸学校への入学は、もう一度中学校に入り直すのと同じことであった。高等学校受験予備校への入学とは矛盾した判断であり、久作の苦悩も想像に難くない。

一月二十七日には早朝から台華社を訪ね、茂丸に対して自分の決断を伝えようとしたが、言いつくすことができなかったの、長い手紙を書き始める。そしてようやく書き終えたのは三十一日のことだった。

一月三十一日（月）

今月——私にとっては有益な一ヶ月——が終わった。私の人生の大きな主題についての父の苦心を終わらせるために、私は長い手紙を書き、このように表明した。「現在の日本の状況では、文学者は必要とされていないどころか、それとは逆に、完全に拒絶されてい

ます。自然の崇拜者 (a worshiper of Nature) になろうと考えたのは大きな間違いでした。だから私は農夫 (a farmer) になろうと決意しました」。

ああ！ 私は嘘をつかなければならない。しかしこの嘘だけが、私の理想を存在させるための方便となるのだ。

たちまち、私は人生の主題を変更させられた息子の心の悲哀を深く感じた。そして、自分の子や孫には決してこのような悲哀を強制するまいと決意した。

この久作の言葉は、「父杉山茂丸を語る」において数え十六歳のできごととして回想される進路選択と、同じ内容である。この事実はもちろん、「父杉山茂丸を語る」の記述を否定するものではない。むしろ、十六歳の時に提起された久作の進路問題が、彼が中学を卒業し、さらに兵役を終えるまで、事実上棚上げされていたものとみるべきだろう。それが兵役を終えたことによって、いよいよ自己の文学志望と、父の期待との乖離に直面しなければならなくなった。久作が立っていた「人生の岐路」は、もはや眼前に迫っていた。

この年の正月を共に過ごした親友の奈良原牛之助は、杉

山龍丸によれば、すでに千葉県立園芸専門学校（現・千葉大学園芸学部）に在学中であった⁴¹。杉山農園の土地購入も、先述の通り、前年十二月に済んでいた可能性がある。これらに加えて久作は、東京府立園芸学校に入る決意をし、文学志望の断念を宣言した。ここにおいて、彼は奈良原とともに農園主となるという、父の期待通りの進路へ踏み出そうとしていたのである。

二月一日、久作は台華社を訪ね、父のテーブルに手紙を置いた。二日、茂丸は手紙の内容に全面的な賛意を示した。久作はこの日を、「自分の運命が決定された日」と形容した (This was the day in which my fate was destined.)。

二月四日、久作は鎌倉の家へ帰り、父の書齋で短篇小説を書いてみたいと思いつく (at once I hoped to make a small novels at there in my father's room)。五日から九日にかけて、小説書きに没頭し、「これが私の人生のなかで最も幸せな日々だと思う」 (These days is my most happy days, I think, in my life.)。そして三月九日に祖母の病気の報を受けて再び鎌倉に帰り、春休みを兼ねて四月二日まで滞在するが、この時も久作は小説執筆に挑戦していた。

三月二十三日（水）

七時起床 十一時就寝

課題—小説執筆

ここ数日、私は鉛筆をもてあそぶことに時間を費やしている。この価値ある時間を使わせてくれている父に、私は謝らなければならない。しかしいつの日か、これも無価値な行動ではないのだと証明してみせる。

これらの行動はあたかも、文学志望断念を宣言した久作が、父から温情として与えられた最後の余暇であったように見える。ところが奇妙なことに、久作が実際に園芸学校に入学した形跡は、日記の記述からは見いだせない。四月になって千駄ヶ谷の下宿に戻った久作は、再び学校に通い始める。しかし日記の記述では、おおむね午前は自宅で自習し、午後だけ学校で授業を受けているので、園芸学校に入学したわけではなく、依然として予備校に通っているものと推測すべきだろう。

農業志望の件がどのように解決され、久作が園芸学校への入学を回避したのか、はっきりしない。しかしいづれにせよ、この通学の日々は穏やかにすぎたらしく、一月頃の日記にみられた煩悶の記述は影をひそめる。父・茂丸からも「これまでの人生で最良の助言を受ける」(四月二十五

日)、「台華社で励まされる」(五月三日)、「児玉源太郎の似顔絵を描いたら褒められ、表具屋へ持っていかれる」(五月九日)など、良好ではほえましい関係を保っている。

こうした日々の描写からは、父との葛藤の最大要因であった進路問題が、何らかの形で後退したことが窺われる。理由は不明ながら、久作が除隊によって直面した進路問題の決着は再び先延ばしにされ、受験生としての生活が再開したのであった。

三、夢野久作の受験生生活(二)——高等学校受験、慶応義塾への入学

五月以降、日記の記述には「試験」への焦りが増え始める。

五月十二日(木)

五時起床 十一時就寝

午前、台華社に杉本氏を訪ねる。それから有名な書店中西屋⁴²に行き、田中氏の物理学教科書を買う。選抜試験(the examination of selection)で満点をとれるだけの知識を得たという、頼るべきしつかりした自信を持ちたいからだ。

五月二十三日(月)

八時起床 九時就寝 午前、代々木八幡神社で歴史を勉強した。

夜は『徒然草』を勉強した。(中略)

時の奔流は、何にも影響されない力で私たちを試験へと押しやっていく。

五月二十七日、久作は予備校に退学届を提出する。そして同日中に、入学試験用の写真 (my photograph of Entering examination) を受け取り、六月十五日、この写真をいずこかへ郵送している。予備校退学後の日記にも自主勉強の記述が多く、とりわけ六月二十四日には、一時間に一度散歩をする以外は、朝から晩まで勉強に励んでいる。

久作が直面していた試験とはいったい何か。杉山龍丸の注では「慶応大学の入学試験」⁴³とされているが、久作が慶応義塾大学予科に入学したのは明治四十四年四月のことである。そこで明治四十四年度『慶応義塾総覧』所収の「大学部規則」を見ると、予科への入学資格者は慶応義塾普通部(中学校に相当) または中学校・文部省指定学校卒業生および専門学校無試験入学検定試験合格者であって(第三条)、入学志願者が定員を超過した場合に限って入試を行

うことになっていた(第四条)。

久作の場合、中学校を卒業しているから第三条を満たす。続いて第四条であるが、久作の入学後の日記(四月二十一日)に記すように、予科文科の入学者はわずか十人で、なかでも歴史科への入学者は、久作ただ一人であった。よって、久作は定員割れのため無試験で入学できたことが考えられる。仮に入試が行われたとしても、試験科目は英文和訳・和文英訳のみである(第五条)から、日記に見られるような物理学・歴史・古文などの受験勉強は必要がない。

また、久作が最もよく勉強しているのはこの年の七月初めまでである。七月においては中旬・下旬の記述が乏しく、七月十日から十三日、十五日から十八日、二十日から二十六日、そして三十日が欠けている。そして八月以降、勉強に関する記述は激減するから、明治四十四年四月の入学に向けた受験勉強としては明らかに不自然である。

これらの事実から、久作がこの年の七月に行われる官立高等学校の入学試験を受けようとしていたことが想像される。例えば明治四十年代の一高受験を題材とする、久米正雄の小説『受験生の手記』では、高等学校の受験出願日は六月にあり、志願者たちは「受験用の写真」を志望校へ提出している。久作の写真撮影および提出も、こうした受験

生の行動と一致するのである。ただし、もし久作が一高を出願したのであれば、『受験生の手記』に描かれたように、一高を自分の足で訪れて写真を提出するはずである。それを郵送で済ませているのは、地方の高等学校に出願したことを示すのだろうか。

いずれにしても、明治四十三年の高等学校入学試験日程は七月十一日から十五日までである⁴⁴。ところが試験間近の七月五日、久作は心身に変調をきたす。

七月五日（火）

十時起床

杉本医師のところへ行った。神経と胃に強い病気があると診断されたので、私は鎌倉へ帰ることに決めた。

七月六日（水）

実際、私は散漫な思考のせいで頭脳を傷めてしまい、それでも心と体の内なる光を求めて苦闘しているのである。横須賀行きの列車内で、私は毎日毎晩と同じように、夢を見たり泣いたりした。鎌倉に着いて、弟や妹たちから歓迎を受けた。

七月八日、久作は東京に帰る。そして翌日の日記には次のようにある。

七月九日（土）

私は人生の経歴の転換点を作ろうと決めた。

私は台華社に行った。父を待ちながら、“theory of being”を書き、夜の一時に帰ってきた父にそれを見せた。

父は大喜びで褒めてくれた。

私は涙を流しながら帰った。

“being”という英単語は存在しないので、久作が何を茂丸に見せたのか、肝心なところがわからない。しかしいづれにしても久作は七月の入学試験を受けることはなかったようだ。受験日程のさなかの七月十四日、久作は叔父（茂丸の弟・杉山五百枝）とともに夜の列車で鎌倉の家に向かうのだった。

その後、八月六日から二十三日にかけて、久作は弟の五郎や親戚とともに、湯原温泉（群馬県みなかみ町）へ旅行したが、大雨に降り込められた。この大雨が大水害を引き起こし、向島其日庵を廃絶させたことは先述の通りであ

る。

九月から十一月にかけて久作は近衛歩兵第一連隊に再入営し、見習士官としての訓練に励む。この時期の日記は日本語による簡潔な記事文である。除隊後の十二月十二日、久作は茂丸から月に七十円の仕送りを受け、Iigura（麻布区飯倉か）に居を構えることになる。明けて一月四日の日記に「私は戸田氏とともに鎌倉から東京に戻った。この夜、戸田氏は飯倉に泊まった」とあるので、久作が実際に飯倉に住んだことがうかがわれる。茂丸は「覚えておけ、七十円といえば区長（district head man）の給料と同額だぞ」と久作に釘を刺した。例えば夏目漱石の帝大講師としての年俸が八百円、月あたり六十六円あまりに過ぎなかったことを思えば、二十一歳の無職青年への仕送りとしては破格の高値というほかない。

明けて明治四十四年一月二十四日、久作は台華社で父や弟妹との同居を始める⁴⁵。つまり飯倉での暮らしは一ヶ月ほどで打ち切られたのである。四月二日、久作は慶応義塾大学予科への入学を父に告げる。

四月二日（日）

この夜、私は慶応大学文学部（the college of

literature of Keio）に入学する決意（resolution）を父に告げた。父は――軽蔑の微笑を浮かべて（with a smile of disdain）――「まあ、いいだろう」（“Well, very good.”）と言った。

この「軽蔑の微笑」が意味するものについて、多田は茂丸の「教育亡国論」を参照し、「自由の気風が強いといわれる慶応の、しかも無用の学問としか思えない文科を選んだ息子を、「こいつも高等遊民の仲間入りか」と苦々しく思ったのだろう」⁴⁶と推測している。しかし、もし久作が高等学校受験に挫折し、無試験で入れる私学を選んだのだとすれば、その引け目によって父の表情に「軽蔑」を感じ取ることもありうるのではないか。

いずれにせよ、明治四十三年の久作は、園芸学校への入学を回避したあと、おそらく高等学校受験に挑もうとしていたのだろう。高等学校は帝国大学への予備教育機関であり、学歴エリートコースの登竜門であっただけに、受験競争は熾烈だった。竹内洋によれば、高等学校の受験競争率は、明治三十年代半ばから急上昇し、四十年代には五倍近くに達していた⁴⁷。久作が通った中央高等予備校のように、私立大学附設の受験予備校が出現したのも、こうした需要

に応じた現象であった。また、早慶を始めとする私立大学は、当時においては高等学校受験の落伍者の受け入れ先として機能していたという⁴⁸。夢野久作の慶応義塾入学も、そうした現実を踏まえた選択であったと思われる。

先に触れた『受験生の手記』の主人公は、受験勉強と恋愛の煩悶から、自身が神経衰弱を発症したのではないかと疑い、結局は受験と恋愛の両方に敗れて自殺する。竹内は、この「神経衰弱」が、「受験生の病気に定位され⁴⁹」、受験勉強に付随して起こる、あらゆる身体の不調の原因とみなされたことを指摘する。試験期間を目前にした久作が、「神経と胃」の病氣と診断されたことは、杉山家の特殊な家庭問題によるものでもあっただろうが、同時に、当時の受験生に通底する苦悶でもあったのである。

杉山茂丸の高等教育不要論は、無学の徒手空拳で立身を果たした茂丸の個性によるものであると同時に、こうした世相に対する批判でもあったはずである。そして、茂丸が主張する「学問＝神経過敏」という図式は、長男・夢野久作の受験によって裏書きされる結果になった。以上、この時期の久作の煩悶については、従来指摘されてきた家庭問題だけでなく、彼の受験生としての生活からも解釈する余地があると考えられるのである。

四、夢野久作の受験生生活（三）——三角武雄との交友

ここまで、受験生時代の夢野久作が送った生活や苦悩についてみてきた。除隊後の明治四十二年十二月から、翌四十三年九月の再入営までの間、久作は家族と離れて千駄ヶ谷の下宿に暮らし、進路問題や高等学校受験といった、次々と眼前に生じる難関を乗り越えようとしたのである。しかし、下宿における久作は、ひとりぼっちではなく、実は同居人がいた。それは明治四十三年一月五日の日記に初めて登場する。

一月五日（水）

夜、私は三角氏とともに、人生の疑問という問題について話し、若者の苦悶を続けた。彼は本も読まず、試行錯誤もせずに、その真つただ中をさまよっている。

一月三十日（日）

私は、人生の債務（the debts of life）に対してたいへんな苦悶をしている三角氏の性格の中に、何事かを見出した。そして十二時まで無駄な時間を過ごし、互いに

何の進歩も利益も得られなかった。ああ！ 私たちは
古代中国ですでに廃れた清談と同じ快楽に耽ったのだ。

第二節で述べたように、明治四十三年一月は、久作にとつては高等学校・大学への進学か、それとも父の希望通りに園芸学校に入つて農業を学ぶか、の大きな岐路に立たされた一ヶ月であつた。久作はこの進路問題を根本的な「人生の疑問」へと敷衍し、同居人の「三角氏」と議論を交わしたが、何の解決も得られなかつた。「清談」とは魏晉南北朝時代の中国で文人たちにより行われた、老莊思想や易学に関する抽象的議論をさすが、ここでは実生活の役に立たない会話という意味で自嘲的に用いられているようである。この時点での久作から見た「三角氏」は、人生へのstruggleという同じ苦しみのなかにいながら、読書量も乏しく、実践の意欲にも欠けた、相談相手としては物足りない人物であつた。しかし同居を続けるうちに、そうした印象に変化が生じる。

二月十一日（金）

私は三角氏の性格に親しみを抱いた。なぜなら、彼はいかなる場合にもとても敏感である。彼は小説を愛

している。彼は熱心に人生の疑問をつかもうとする人であり、物事の三要素―知性・情熱・義務―を観察している。彼が神田へ本を売りに行くとき、私も同行して目の当たりにしたのだが、彼は東京をよく知る人である。彼は強固な意志をもち、困難な苦闘を続けながら、弱者に対しては優しい心をもっている。

これらの条件によつて、私は彼を愛するようになった。毎晩、私は彼と一緒に勉強するし、彼が寢床に入るのを見送つたあとも、彼の寝顔を眺めている。そして毎朝、彼は私の間拔けな寝顔を見て、優しく叩いて起こしてくれる。

ああ！ 私たちはなんと幸せな若者だろう！

久作が挙げた「三角氏」の特徴―sensitive in all cases, loves novels, eager one who purchases the question of life―は、いずれも久作自身にも当てはまるものであろう。すでにみたように、久作は「神経過敏」と評される「文学青年」であり、「人生の問題」への解答を求めて苦悩し続けているのだから。久作はそうした諸点において「三角氏」を同志として認めた。さらに東京の事情に通じていること、そしてweak oneに對する優しや、という両点を、自分にはない

美点として見出したようである。前者については、久作は幼少期のわずかな期間を除けば、東京暮らしは中学卒業後に初めて経験したものであるから無理もない。後者については異論もあろう。しかし久作が大正元年八月七日の日記に、異母弟・五郎の死について「先づ余は生前の弟に対し愛すべき道は知り乍ら一種の峻厳を以て対したる事を告白せざる可からず。愛す可き心はありき。然れ共性来小供嫌なる余は分別臭き心を以て彼に對し彼をして年寄臭からむ事を求めたりき」と書き始めているところに、彼の自己認識―庇護すべき相手に対して冷淡であること―への引け目が表出している。だからこそ久作は、「三角氏」の *tender mind* を羨んだのではなかったか。

このように、明治四十三年一月から二月にかけて、久作は父の「熱誠」に屈服して文学志望の断念を宣言するとともに、「三角氏」への親近感を急速に深めていった。この「三角氏」とはいったい誰であろうか。杉山龍丸による注では、「三角哲夫。夢野久作の修猷館時代からの友人で発明家。大陸浪人の一人となる。」⁵¹とされている。この三角哲夫の伝は詳らかでないが、茂丸の著書『百魔』正統・俗戦国策』および『浄瑠璃素人講釈』（大正十五年）には、印税全額を三角が計画していた化学研究所の設立資金として提

供する旨が記されている⁵²。また、昭和十八年一月二十日付『読売報知』（現『読売新聞』）の婦人欄記事には、「日本食糧厚生協会」の顧問技師という肩書で三角哲夫が登場する。三角は、当時日本の信託統治領ないし占領地域であった南洋諸島で採れるパパイヤから、消化酵素パインを精製し、玄米早炊きの調理材「食栄素」として実用化に成功したという⁵³。これが同一人物であれば、三角を「発明家」とする龍丸の記述も裏付けられる。いずれにしても、修猷館を卒業し、茂丸から援助を受けた人物ということで、三角哲夫には久作との二重の縁がある。したがって「三角氏」を三角哲夫に比定した龍丸の判断には無理からぬものがある。

ところが、久作の日記によれば、「三角氏」は明治四十三年七月に岡山の第六高等学校を受験して合格している。そこで『第六高等学校一覽』明治四十三年―四十四年掲載の生徒一覽を見ると、一年生で三角姓である者は、三角哲夫ではなく、一部甲類在籍の東京府平民・三角武雄ただ一人なのである。そして武雄は、トキワ松学園創設者として、また唱歌『七里ヶ浜の哀歌』（通称「真白き富士の嶺」）の作詞者として知られる教育家・三角錫子（一八七二―一九二二）の末弟なのだった。以下、中村尋『真白き富士の嶺

三角錫子の生涯」(平成四年)ほかの記述に基づき、三角家および武雄の経歴について紹介する。

三角家はもと加賀国河北郡二日市村の農家である。錫子・武雄の祖父にあたる三角風藏(一七八四—一八六八)が、金沢に出て足軽となり、和算家・本多利明に入門して算術・測量・砲術を学び、その功績により士分に取り立てられた。測量術に通じたことから「三角」姓を、藩有の風砲(空気銃をさすらしい)の修理・保管を担当したことから「風藏」名を、藩主より賜ったという⁵⁴。

錫子の父・三角風三は、風藏の婿養子である。廃藩置県後、風三は石川県庁の下級官吏となっていたが、事業に失敗して郷里を去り、愛知県庁を経て、最終的には静岡県引佐郡長を務めた。子宝に恵まれ、長女・錫子を始めとして、茂喜、愛三、鎌三、康正、そして武雄という息子たちをもうけた。男勝りの学問好きであった錫子は、明治二十五年に東京の女子高等師範学校を卒業し、小学校教師として札幌に赴任した。ところが長弟・茂喜は親の許しを得ずに女性と同棲を始めたことで三角家から義絶され、さらに明治三十年には風三が急死した。愛三以下のすべての息子たちを帝国大学に学ばせ、学士にするのが風三の遺志であった。そのために錫子は結婚後も教職を続けて弟たちを養っ

たが、それを快く思わない夫との衝突が絶えず、五年で離婚するという苦難を経験した。

明治三十二年、脚気のため受験が遅れた愛三と、鎌三が同時に第一高等学校に入学した。愛三が旭硝子創業者・岩崎俊弥(三菱総帥・岩崎弥太郎の甥)の弟にあたる輝弥の家庭教師に選ばれたのをきっかけに、三角家は岩崎男爵家の庇護を受けるようになった。愛三は東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業して旭硝子に入社し、同社取締役に至る。鎌三は同工科大学土木工学科を卒業して鉄道院に入り、技師として活躍した。

明治三十九年、愛三・鎌三の帝大卒業と入れ替わりに、康正が一高に入学する。康正は東京帝国大学医科大学を卒業し、医学博士に至っている。一方、長年の疲労から肺病を発した錫子は、転地療養のために同三十九年に神奈川県逗子町へ移住し、鎌倉女学校(現・鎌倉女学院中学校・高校)の教諭となった。鎌倉女学校は、東京開成中学校長・田辺新之助(哲学者・田辺元の父)が明治三十七年に創設したばかりだったが、鎌三・康正がともに開成の生徒だったため、錫子は田辺との縁故をもっていたのである。

これに先立つ明治三十六年、田辺新之助は逗子開成中学校を創設した。したがって当時の東京開成・逗子開成・鎌

倉女学校は、すべて田辺を校長とする姉妹校の関係にあった。ところが明治四十三年一月二十三日、逗子開成の生徒十二人が校有のボートを無断で漕ぎだし、七里ヶ浜沖で転覆、全員が遭難死する⁵⁵。これを深く悲しんだ錫子は、歌い覚えた讚美歌のメロディに歌詞をつけ、二月六日に行われた追悼式典で鎌倉女学校生徒に歌わせた。こうして生まれた『七里ヶ浜の哀歌』はボート遭難という文脈を離れて、唱歌として長く歌い継がれることとなる。

さて、末弟の武雄も、鎌三・康正と同じく東京開成に通学していたことが、久作の日記から判明する。

一月十日(月)

三角氏とともに九時に家を出て、中央大学に入学しに行った(三角氏は私と別れて開成中学(Kaiseichugaku)に行った)。

そこで開成学園校史資料室所蔵の学籍簿(『明治四十年度 生徒并保証人』)を調査したところ、武雄の経歴を知ることができた。彼は明治二十三年四月二十七日生まれで、久作より一歳年下である。明治四十年四月、中学五年生の時に正則中学校から東京開成中学校に転入し、翌三月に卒

業している。しかし同年および翌年の高等学校入試に失敗したらしく、明治四十二年九月に開成中学校補習科に入學している。この補習科は別名を開成予備学校ともいい、中学校卒業者のための高等学校受験予備校であった点で、夢野久作が通學した中央高等予備校と同様である。先に引用した岸信介の回想によれば、岸と同年に一高へ首席で入學した我妻栄は開成補習科の出身で、「同校の様子は、中央大などとの予備校と違い、人数も少なく規律も厳格であったそうである」⁵⁶という。

学籍簿によると武雄の現住地は「東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五四四番地」、保証人は同所在住の塚崎直重とある。この塚崎は、夢野久作の日記に「Mr. Tsukasaki」や「Mr. 塚崎」⁵⁷として登場する人物と同一とみてよいだろう。よって、三角武雄と夢野久作が千駄ヶ谷の塚崎直重方に下宿していたことが確かめ得られたのである。この住所は現在の渋谷区千駄ヶ谷四丁目十二番に相当し、幻冬舎ビル新館の東隣にあたる⁵⁸。ただし塚崎の素性については、学籍簿の保証人族籍及職業欄に「大分県平民無職業」、武雄との関係に「知己」とあるほかには手がかりがない。したがって久作が武雄と同居するに至った経緯も未詳である。ただし、鎌倉に別荘を構える杉山家と、鎌倉女学校に務める三角錫

子との間に、接点があつたと想像する余地はあるかもしれない。

明治四十三年、二十一歳の久作と二十歳の武雄は、ともに高等学校入学を目指す受験生として同居し、勉学を共にし、人生の悩みを話し合つた。武雄は亡父の遺志に従つて、ぜひとも高等学校から帝国大学へ進学しなければならなかつた。姉・錫子の長年の辛苦、そしてその期待に応えた三人の優秀な兄たちの存在も、武雄にとつて重荷になつたであろうことは想像に難くない。しかるに武雄はすでに、中学卒業後、高校受験に二回も失敗しているらしいのである。高等教育不要論を説く父をもちながら進学を目指す久作と、高等教育に進まなければならない家庭環境にありながら失敗し続けている武雄は、全く対照的な事情にありながら、進路問題から来る家族との葛藤という点において共通する悩みをもち、共鳴し合つたのである。先に紹介した久作の文学志望断念宣言の直前にも、久作は武雄と数時間にわたつて話し込んでゐる（一月二十九日の日記）。

明治四十三年三月、三角錫子は鎌倉女学校を退職した。おりから、茂喜が札幌で病に伏していることを知り、面会して和解を果たす。茂喜は五月十四日に亡くなり、錫子は茂喜の娘二人を引き取つて鎌倉町材木座へ転居する。これらに関

係すると思われる記述も夢野久作の日記に見られる。

四月二十七日（水）

夜、三角氏は上野駅へ行き、北海道から兄の病気を知らされていた姉に会つた。彼が姉を見送つたかどうかはわからない。私の方は、人生の最後の課題に向かつて苦闘しながら、一人で勉強していた。

五月三日（火）

夜、兄を訪ねていた三角氏が帰つてきて、兄の死という悲報により、深い物思ひに沈んでいた。

五月になると、武雄も久作に先立つて、受験用と思われる写真の用意をしている（五月二十日の日記）。その頃ハレー彗星が接近し、五月十九日夜に地球上の生物が死滅するとの風評が流れた。受験を間近に控えた久作と武雄は、この一件にも心を動かされている。

五月十九日（木）

彗星は私たちの存在に対してなんら軽微な影響をも残さずに過ぎ去つた。

今夜、私は勉強に嫌気がさして、散漫な思考へと沈んだ。

五月二十二日（日）

午前、物思いにふける。歴史を勉強。午後、新宿へ行って野球クラブの試合を見る。

夜、私たちはベランダの近くに寝転んで、数時間にわたり話しあった。空には月が浮かび、傍にはサイダーと夏みかんを置いていた。

お前の心に真実であれ（BE TRUE TO YOUR HEART）

五月二十五日（水）

夜、私たちは西の空に彗星を見た。

七月三日、武雄は第六高等学校受験のため、午後三時半の汽車で岡山へ旅立った。久作は、「彼は私にとっても価値のあることを教えてくれたし、彼と同じ場所で暮らしたこの数ヶ月で、私には彼との思い出がたくさんできた」と記し、武雄との別れを惜しんだのであった。この年の受験に、武雄はようやく合格した。一方、久作はおそらく神経衰弱と

胃病を理由として、受験を断念することになる。こうして二人の受験生の、短くも濃密な同居生活は終わりを迎えたのである。

明治四十四年、武雄は春休み・夏休みになると、岡山から帰京して、鎌倉材木座の錫子の家を訪ねていたらしい。久作も長谷の家から錫子の家を訪ね、武雄に会っている。

三月三十日（木）

午後、三角夫人（Mrs. Misumi）の家を訪ねた。娘二人、三角氏のいとこ、犬一匹、雄鶏一羽、雌鶏五羽と花々があった。

帰りがけ、三角氏は駅員と口論をした。

錫子が材木座の家の庭に花々を植え、鶏を飼っていたことは、中村による描写にも一致する⁵⁹。また、五月二十一日の日記には「夜、三角家へ行き、彼が最近書いている『呪われた家』（House Cursed）について話した。ここへ来るたびに、私はいつも食べ過ぎて胃を悪くしてしまう」とあり、久作は武雄の友人として錫子から大いに歓待されたようである。

前述の通り、同年七月二十三日、久作は夏目漱石と入れ

違いに鎌倉を訪れ、夏休みを利用して長期滞在している。中学校時代の久作は漱石を読んでいたが⁶⁰、父の家に漱石が滞在したことについては日記に全く記していない。

鎌倉到着の翌日、久作はさっそく材木座の三角家を訪ね、ともに海水浴を楽しみ、長谷の杉山家に武雄を招いて、ともに蓄音機を聴く。初の国産蓄音機「ニッポノホン」が前年（明治四十三年）に発売されたばかりという時代に、久作は最先端の娯楽を友人に提供したのである。そして夏休み明けの九月四日夕方、久作は岡山へ帰る武雄を駅まで見送りに行った。夢野久作の日記における、三角武雄の登場はこれが最後であり、両者の接点は、その後いつさい見られなくなる。

その後の武雄について知り得たところを略述する。彼は第六高等学校在学中、酒を飲んで地元の青年団と喧嘩し、停学処分を受けたと自ら述べている⁶¹。そうしたこともあるが、六高では二回留年し、大正四年（一九一五）七月、満二十五歳にして卒業⁶²。同年九月に京都帝国大学法科大学法律学科に入学したが、さらに大正六年度まで一年次に留年。大正七年度以降は在学者名簿に載っていないことから、武雄は大正七年七月をもって退学したと考えられる⁶³。

退学後、武雄は日本での生活に見切りをつけて中国へ渡り、上海航路の事務長となる。昭和三年（一九二八）、営口に支店を開業。その後、満鉄の子会社である大連汽船の天津支店長として長く勤務した。久作没後の昭和十二年七月二十九日、中国共産党八路军が日本人居留民を襲撃した通州事件では、監禁されたのちに日本軍に救助されている⁶⁴。昭和十五年には天津日本図書館評議員の職にあり⁶⁵、同十九年には天津市第三十七次居留民会通常会議の議長を務めている⁶⁶。すでに五十歳代の武雄は、天津の日本人居留民社会の重鎮になっていたようだ。日本の敗戦後に引き揚げて鎌倉に隠棲し、昭和四十一年に死去。姉・錫子とともに、鎌倉市材木座の長勝寺に葬られている⁶⁷。

おわりに

本稿では『夢野久作の日記』の記述を手がかりに、若き日の久作が直面した進路問題や、友人関係について述べた。久作の高等学校受験に関しては推測の域を出ないが、千駄ヶ谷の下宿の住所や、同居人・三角武雄の経歴について調べたことは、久作の伝記研究の進展に資するであろう。

西原和海の言を冒頭に引用した通り、夢野久作の人生

は、大筋において、父・杉山茂丸の設定したコースをたどらされるものだった。大正二年、久作は慶応義塾を中退し、福岡県香椎村に杉山農園を営みはじめるが、これも茂丸の意向によるものだったという。「文学を諦め、農業に従事する」という、久作が数え十六歳にして茂丸に迫られた決断は、こうして実現を余儀なくされた。この杉山農園は久作の終の棲家となり、文壇デビュー後も東京に移住することなく、福岡県の風土を色濃く描き出す作品群を、香椎村の山中で書き続けることとなった。

しかし、一方で、父の命令を守って一年志願兵の兵役を勤め上げた久作が、除隊してから慶応義塾に学ぶまでの約三年間、それなりに自分の志望を追求する自由を得られたことも、本稿により確かめられた。確かに、除隊後まもない明治四十三年一月には進路問題が再燃し、久作は涙ながらに文学志望断念を表明せざるを得なかった。しかしそれは、事情は不明ながらもいったん猶予され、久作は高等学校への受験、そして私立大学予科（それも文科）への入学を試みることができた。さらに、一時的ながら、茂丸は久作へ月七十円という破格の高額の仕送りをすら提示したのである。

ここで茂丸の「教育亡国論」を振り返れば、彼は確かに

中学校卒業後ただちに高等学校を受験することの弊害を説いている。しかし、中学校を出てから兵役を終えてみて、それでもなお高等教育を志望するのであれば、それは本人の自由だとも述べている。茂丸が久作にしばらくの猶予を与えたことも、この論旨から理解することができる。

茂丸の没後、久作は「父杉山茂丸を語る」において、「熱誠」によって息子の志望を押しつづけた父を回想した。繰り返すが、それは久作の人生の大筋において正しい。しかし久作の青年期に立ち返ってみれば、父子関係は必ずしも一方的なものではなかったとも思われる。

そして、受験生時代に悩みを共有した同居人・三角武雄の存在が久作に与えた影響についても、今後の研究が俟たれる。その一例として、久作が大正七年に発表した初期習作「中学生」が、明治四十四年春の開成中学校を舞台としていることが挙げられる。本稿で述べた通り、開成は武雄の出身校なのである。筆者は同作についても開成の校史資料と対照し、論ずる用意があるが、すでに紙幅が尽きたので、別稿を期したい。

末筆ながら、三角武雄の学籍簿の調査に際して、開成学園校史資料室の皆様のご協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1 杉山茂丸の生年月日は、本人が『百魔続篇』に記す元治元年（一八六四）八月十五日が通説となっているが、杉山家の戸籍謄本『夢野久作の日記』（四二三頁）には文久三年（一八六三）九月十七日と記載されている。
- 2 西原和海「夢野久作と父・杉山茂丸」（『夢野久作著作集』第五卷、葦書房、平成七年）二九三頁
- 3 夢野久作「父杉山茂丸を語る」（『夢野久作著作集』第五卷）一四六頁
- 4 『思想の科学』第五次五十六号・五十七号（昭和四十一年十一月・十二月）掲載。
- 5 例えば、坂上知之「杉山茂丸と河原阿久里・河原信一」（『民ヲ親ニス』第五号、「夢野久作と杉山3代研究会」事務局、平成二十九年、二五一—二六二頁）は、杉山家の親族関係に関する龍丸の記述に誤りがあることを指摘し、校注の全面的なやり直しの必要を訴えている。
- 6 杉山龍丸編『夢野久作の日記』（葦書房、昭和五十一年）所収の「杉山家戸籍謄本」（四二二—四二七頁）による。
- 7 「父杉山茂丸を語る」、一四八頁
- 8 同、一五一—一五二頁
- 9 夢野久作「涙香・ポー・それから」（『夢野久作著作集』第六卷）四四頁
- 10 「父杉山茂丸を語る」、一五四—一五五頁
- 11 「父杉山茂丸を語る」、一五五—一六六頁
- 12 「陸軍一年志願兵条例」（『官報』第一六九六号、明治二十二年二月二十七日、二六三—二六五頁）第十六条による。
- 13 多田茂治「夢野一族」（三二書房、平成九年）一五七—一五八頁
- 14 杉山龍丸「わが父・夢野久作」（三二書房、昭和五十一年）一六六—一六七頁
- 15 竹田仰・高嶋正武・杉山満丸・手島博編『夢の久作のごとある』（『夢野久作と杉山3代研究会』事務局、平成三十年）八頁
- 16 杉山茂丸「其日庵叢書第二編 青年訓」（弘道館、大正三年）四八—四九頁。なお、坂上知之の調査によれば、この論説の初出は『サンデー』第三三一号（大正二年八月十七日）である。〔参考〕坂上知之「杉山茂丸〈百魔〉の書誌と著作年譜」（『民ヲ親ニス』第四号、「夢野久作と杉山3代研究会」事務局、平成二十八年）八八頁
- 17 『夢野久作の日記』四六五頁
- 18 室井廣一「杉山茂丸論ノート（6）」（『東筑紫短期大学研究紀要』（昭和五十九年十月））四七一—五八頁
- 19 室井、四九頁
- 20 室井、四九頁
- 21 多田、一五八頁
- 22 室井、五一・五二頁
- 23 多田、一二八頁
- 24 室井、四八頁
- 25 杉山茂丸「百魔」（大日本雄弁会講談社、大正十五年）第二十九

章に詳しい。

- 26 杉山茂丸『俗戦国策』（大日本雄弁会講談社、昭和四年）四七七頁

- 27 これらの経緯については、馬場宏恵「杉山茂丸向島邸——児玉神社と日活向島撮影所——」（『民ヲ親ニス』第三号、「夢野久作と杉山3代研究会」事務局、平成二十七年、六一—七三頁）に詳しい。

- 28 室井、四九・五五頁。多田、一四七頁。

- 29 『漱石全集』第十七卷（漱石全集刊行会、昭和四年）二〇九—二一〇頁

- 30 『彼岸過迄』（岩波文庫、岩波書店、平成二年改版）三三八頁、石崎等の注による。

- 31 室井、五〇頁

- 32 『わが父・夢野久作』一六〇頁

- 33 多田、一五一頁

- 34 『夢野久作の日記』四四〇頁、注一三

- 35 「中央大学デジタルアーカイブズ」内「開学当初から旧制時代の学則、規則類」（https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/history/history_06/regulations/）を利用した。

- 36 『中央大学学制一覧』【第四章 予科】三一—三四頁による。

- 37 『中央大学七十年史』（中央大学、昭和三十年）八八—八九頁による。

- 38 「中央高等予備校学則」、「中央大学百年史 資料編」（学校法人中央大学、平成十七年）一一七—一一七二頁による。

- 39 「和辻哲郎の中央高等予備校回想（半世紀前の東京）抄録」、「中央大学百年史 資料編」（学校法人中央大学、平成十七年）二二—二二四頁。底本…和辻哲郎『自叙伝の試み』（中央公論社、昭和三十六年）。

- 40 岸信介「我が青春 生い立ちの記 思い出の記」（廣済堂出版、昭和五十八年）、一二三頁。

- 41 『夢野久作の日記』四四〇頁、注三

- 42 明治十四年、丸善創業者・早矢仕有りが神田区表神保町に開業した書店。大正九年、丸善に買収され神田支店となった。（『丸善百年史』（丸善株式会社、昭和五十五年）上巻九四—九六頁、資料編四四六頁による）

- 43 『夢野久作の日記』四四一頁

- 44 「本年の高等学校入学生」、「東京朝日新聞」明治四十三年五月十二日三面による。ただし七高造士館のみ六月実施。

- 45 なお、大正元年八月七日の日記「弟の死」では、台華社への転居が五月初めとされている。しかし明治四十四年五月の日記に転居の記事はない。久作の記憶違いか、あるいは日記公刊時に「正月」が「五月」へと誤読／誤植された可能性がある。

- 46 多田、一七六頁

- 47 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社学術文庫、平成二十七年）七四頁

- 48 竹内、七七頁

- 49 竹内、九五頁

- 50 『日本国語大辞典』第二版による。
- 51 『夢野久作の日記』四四〇頁、注九
- 52 『百魔』巻頭文「百魔の刊行に就いて」四一六頁、『百魔続篇』「はしがき」一一三頁、『浄瑠璃素人講釈』巻頭文「本書の刊行に就いて」（頁番号なし）、『俗戦国策』巻末「謹告」による。ただし化学研究所建設が実現したかどうかは不明。
- 53 「南のパ、イヤ利用 玄米食へゝ食栄素」 試食会に好評、『読売報知』昭和十八年一月二十日朝刊四面
- 54 『石川県史』第三編（石川県、昭和八年）六一六―六一八頁に三角風蔵の伝がある。
- 55 この事件により引責辞任した逗子開成中学校舎監の息子が小説家・宮内寒彌であり、私小説『七里ヶ浜』（新潮社、昭和五十三年）に事件の詳細を記している。
- 56 岸信介、一二三頁
- 57 『Me 塚崎』表記は明治四十三年六月十八日のみ。『Me Tanaka』は明治四十三年一月二十四日・十二月八日、明治四十四年一月十七日・七月二十二日などにある。なお、一月二十四日に久作が府立園芸学校を見学した際も、塚崎が同伴したと記されている。
- 58 『東京市及接続郡部地籍台帳』第二巻（東京市区調査会、明治四十五年）および『東京市及接続郡部地籍地図』下巻（東京市区調査会、大正元年）を参照。
- 59 村上尋『真白き富士の嶺 三角錫子の生涯』（足立区コミュニティ文化・スポーツ公社、平成四年）二〇五頁
- 60 「私は中学を卒業した切り上の学校に行かないが、その中学時代が小説の耽読時代であった。漱石、蘆花、紅葉、馬琴、為永、大近松、世阿弥、ヂュマ、ポー、ホルムズ、一千一夜物語、イソップなぞ片端から読んだ。二葉亭、涙香、思案外史、鵬外なども漁った。」（路傍の木乃伊、『夢野久作著作集』第六巻、八五頁）
- 61 三角武雄「十ちがひ」、「思ひ出づるままに」（三角愛三追悼録編纂会、昭和十六年）一四二頁
- 62 『第六高等学校一覽 大正四―五年』一七七頁
- 63 『京都帝国大学一覽』大正四―五年の二八六頁、大正五―六年の二九三頁、大正六―七年の二八四頁に、いずれも法科大学法律学科第一学年として記載。
- 64 「欠」／支店長ら 監禁さる 一同無事危機を脱す、『読売新聞』昭和十二年七月三十一日朝刊一面
- 65 李雪「天津租界における日本の教育事業 ―一九〇〇―一九四五年を中心に―」、(早稲田大学大学院博士論文、平成三十年)、二五〇頁
- 66 池田健雄「華北占領地居留民社会の研究」、(千葉大学大学院博士論文、平成二十八年)、六一頁
- 67 村上、二三八―二三九頁

(東京大学大学院 博士課程)